

I 特発性間質性肺炎の診療 肺移植

名古屋大学大学院医学系研究科呼吸器外科学 芳川 豊史

KEY WORDS

- 肺移植
- 間質性肺炎
- 生体肺移植
- 脳死肺移植

Lung transplantation.
Toyofumi Fengshi Chen-
Yoshikawa (教授)

はじめに

間質性肺炎は、肺の間質と呼ばれる肺胞隔壁に炎症や線維化をきたす一群の疾患の総称である。間質性肺炎には、膠原病、薬剤、放射線などの原因が明らかなものと原因不明のものがあり、後者は特発性間質性肺炎 (idiopathic interstitial pneumonias: IIPs) といわれる。間質性肺炎は、良性疾患であるが、その予後は一般的に不良である。近年、複数の抗線維化薬などが開発されたが、その効果には限界があり、同薬を用いた治療に反応しない重症例には、肺移植が最後の治療オプションとなる。IIPsの一型である特発性肺線維症 (idiopathic pulmonary fibrosis: IPF) は、肺移植の適応疾患のなかでも、予後が最も悪い疾患であり、肺移植の適応や登録の時期、待機期間中の対応など、十分な注意が必要である。

本稿では、肺移植がどのようなものであるかを、肺移植の歴史とわが国に

おける肺移植の現状を紐解きながら説明する。

I. 世界の肺移植とわが国の現状

肺移植は、1983年のカナダのトロントグループによる成功以来¹⁾、これまでに世界で少なくとも6万例が行われ、慢性呼吸不全患者にとっての最後の治療法として、確立した治療手段となった²⁾³⁾。わが国では、1997年に「臓器移植に関する法律」が施行され、1999年に同法に基づく初の脳死臓器移植が、心臓・肝臓・腎臓において行われた。肺移植については、1998年に岡山大学で日本初の生体肺移植が行われた。一方、脳死肺移植は、2000年に、大阪大学と東北大学で日本初の症例が行われた。その後、全国で年間約10例程度の時期が続いたが、2010年の臓器移植法の改正後、本人の同意だけでなく、家族の同意があれば脳死ドナーとして認